異分野連携研究と地域を総合的に研究する試み
世界農業遺産（GIAHS）高千穂郷・椎葉山地域研究会の取組を事例として

井上果子（地域資源創成学部）
西和盛（地域資源創成学部）
松岡崇暢（地域資源創成学部）
鈴木良幸（地域資源創成学研究科）
橋口正嗣（地域資源創成学部）

１．はじめに

本稿に与えられた課題は、「宮崎大学 GIAHS 研究会」（以下、GIAHS 研究会）が行ってきた取組を紹介することを通じ、異分野連携研究への示唆を得ることである。この課題に対し、本稿ではまず、異分野連携研究がなぜ必要とされるのか、背景にある考え方を整理した上で、GIAHS 研究会の概要と具体的な取組を紹介し、異分野連携研究のあり方や今後の可能性へとつながる議論を提起する。GIAHS 研究会は、宮崎大学の３つの学部（地域資源創成学部、農学部、教育学部）に所属する研究者及び世界農業遺産（GIAHS）高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会（以下、協議会）メンバーが集うグループであり、多様な専門領域の研究者・関係者十数人によって構成される。どのように異分野の研究者が集うグループが組織され、活動が展開し、研究が継続されているのか。それらを紐解くことで、異分野連携研究の可能性を論じることを本稿の主たる目的とする。

なお、本課題は、2022 年 9 月 28 日に開催された地域資源創成学部特別研究会の報告時に課されたものであり、また 2022 年 10 月 18 日開催の GIAHS 研究会においても報告し議論するプロセスを経た。本稿では、そこでの報告内容と議論された内容の一部を紹介しつつ若干の考察を加える。また、2018 年度までの活動経緯や研究会設立当初の展開等については、「宮崎大学 GIAHS 研究会の取り組みと異分野連携研究への示唆」（西ら、2019）に詳細が示されている。本稿は、特に 2019 年度以降の GIAHS 研究会における展開を追記しつつ GIAHS 研究会設立から約 7 年間に渡る取組を異分野連携研究に焦点を当てる形で論述していく。

２．異分野連携研究

現代社会において、我々が直面する様々な課題に対し、学術上の個別ディシプリンに依拠した知見のみでは、解決することができない限界が近年ますます認識されるようになった。「個別」領域のみに特化して考え、知見を深めることができたとしても、現実に起こっている問題は、必ずしも特定の領域のみで完結して存在しうるものでない。現実に起こっている課題に対し、特定の領域のみを探るのではなく、問題に応じた適切な領域を含む総合的・学際的な研究が必要との認識である。

特に、フィールド（現場）に存在する問題については、特定のディシプリンに依拠した研究は不十分である。なぜか。関（2005）は、複雑適応系のシステム論をもって要素還元主義的なアプローチの限界に言及する。一般的にみられる研究では、独立変数と従属変数を決定して因果関係を分析する要素還元主義的な方法が盛んにとられる。しかし、関は、自己意識を備えた「人間社会」と生態系を含む「環境」とが相互作用する系ー「複雑適応系」ーにおいて、「そもそも変数同士は非線形な相互作用を及

ぼしあっており、「独立」、「従属」などとは決められない」場合が多く、要素還元主義的な分析ではシステム全体を把握できない、と論じる。相互作用しながら適応的変化を遂げる「複雑適応系」のシステムを理解するには、複数の要素の相互作用関係を全体的に把握する必要がある、という考え方である。

では、いかにフィールドを総合的にとらえることが可能となるのか。方法として第一に浮かぶのは、複数の異なるディシプリンを持つ研究者が集い、共同研究等を通じてものごとを総合的にとらえるアプローチであり、第二に、個々の研究者が個別ディシプリンに固執せず複数のディシプリンに跨る研究によって総合的アプローチを自らに課す方法が考えられる。前者のアプローチは、「文理融合」、「異分野連携」といったキーワードとともに複数の分野に跨る研究者による共同研究を促す仕組みや組織・体制づくりが推進されている現在の研究・教育上の動きにも通じる。一方、後者のアプローチは、現実に生じている問題を取り扱う研究、具体的には、地域研究や環境研究といった現実の問題が「フィールド」に存在し、そのフィールドの現実から動かされ、一人の研究者が学際的に研究を行う挑戦を挙げることができる。井上（2002）は、このような研究者を「ハイブリッド研究者」と呼び、問題に応じて必要な方法（道具）を選んで使い、複数の手法を身に着けていく研究者像を提起している。その背景には、「本来は研究の方法が先にあるのではなく、研究の対象や目的が先に」あり、「研究の対象および課題設定によって採用すべき方法は変わってくる」との考え方がある。「フィールドで起こっている実態をなるべく歪めることなく把握・理解し、因果関係を説明し、あるいは意味を解釈するためには、１つのディシプリンに拘泥せず、最適な手法を選んで援用するという総合アプローチを試みること」が重要との指摘である。

但し、共同研究によるアプローチにしても、個々の研究者が学際的研究を行うアプローチにしても、理論的には可能であっても、その実践については難しさが伴う。共同研究は、単独のディシプリンの中で研究し、個別に論文を執筆・発表するような個別研究の集まりとなることが多く、「1+1+1＝3」で終わってしまいがちである。また、フィールドからの問題意識に動かされながら複数のディシプリンを個々の研究者が身に着け研究を遂行するアプローチについては、個人の能力に大きく依存せざるをえない。また、地域研究の経験によると、度々研究者自身がディシプリンの核を持つことができず、中途半端さによる居心地の悪さを抱えていくことは長年共有されてきた課題でもある（武内 2013）。

そのような困難に対し、いかに研究者は異分野連携研究を展開していくことが可能なのか。次章にて GIAHS 研究会の概要を紹介し、いかに異なるディシプリンの研究者が GIAHS 研究会に集い、活動を展開してきたのか説明した後、第４章にて改めて異分野連携研究の可能性について考えていくことにしたい。

３．GIAHS 研究会

3.1　GIAHS 研究会発足の背景

GIAHS 研究会は 2015 年 11 月頃からゆるやかに組織され、活動が展開した。GIAHS 研究会発足には、高千穂郷椎葉山地域側と宮崎大学側の両方にそれを推進する合理的な理由があった。まず、地域側については、2015 年 12 月に宮崎県北部に位置する３町２村（高千穂町、五ヶ瀬町、日之影町、椎葉村、諸塚村）が世界農業遺産（GIAHS: Globally Important Agricultural Heritage Systems）に認定されたことが起点にあった。GIAHS は、社会や環境に適応しながら継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業とそれに密接にかかわっ

て育まれてきた文化、ランドスケープ・シースケープ、生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域を国連食糧農業機構（FAO: Food and Agriculture Organization）が認定する制度である。2022 年 12 月時点で、世界 23 カ国の 72 地域（うち、日本では 13 地域）が GIAHS に認定されている。GIAHS に認定された地域の多くは、その地域に存在する特徴的で際立った農作物などが農業遺産として認定されている。そのため、具体的な農作物の名称や農業システムが GIAHS 認定時のサイト名に冠われ、何が評価されたのか比較的わかりやすい。しかし、高千穂郷椎葉山地域については、その「山間地農林業複合システム」が認定されたもので、一つの特徴が取り上げられるものではない。それは、食料・生計、農業生物多様性、伝統的な知識システム、文化、社会、景観といった認定基準に関連する要素のすべてが複合的に存在し、相互に関係しあうという複雑なものである。認定された当時、特出したわかりやすいものがなく、その価値の理解や評価が難解であることが問題とされた。特に、GIAHS 認定後は、その地域の保全計画の実施に関する進捗と効果がモニタリング・評価されることになっており、複雑で複合的なシステムが認定された高千穂郷椎葉山地域を、多面的に理解していく専門的な知見が必要とされた。そのような地域側のニーズに対し、宮崎大学の異なる専門領域の研究者が、それぞれの専門的知見をもって地域の価値を理解する研究を行うことは地域側から歓迎されるものであった。

一方、宮崎大学側にあった GIAHS 研究会発足の経緯については、西ら（2019）に詳細が記載されている通りである。宮崎大学の研究者が本グループに参加する動機について改めて振り返ると、研究の対象が「フィールド」にある研究者にとって、高千穂郷椎葉山地域に存在する遺産的価値を研究する機会は、まさに「フィールド」に入る「ビザ」を与えられるようなものであった。（特に新学部（地域資源創成学部）設置に際し着任したばかりの研究者にとっては、県内地域とのつながりを構築していくことが期待されていた時期であり、願ってもない機会でもあった。）なお、研究を遂行するにあたり、2016 年度から現在に至るまで、毎年、協議会から受託研究「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域に関する研究」を受託している。この予算が継続していることで、研究会メンバーは常にフィールドに入り、研究を続けることができる状況にある。複数の研究者が、継続的に様々な領域でフィールド研究を続け、また、時には研究のみならず大学の学部生や院生とともに教育活動の一環として、フィールドに入り続けている。研究者や学生それぞれが高千穂郷・椎葉山地域の住民や関係者と接する中で、現在は、地域のどこであっても、誰かを介すと皆がつながっている状況になっており、地域住民と GIAHS 研究会は互いに馴染みの存在となっている。そのような関係の構築によって、研究や教育活動は、ますます地域社会に受容され、円滑かつ効果的に実施できる状況となっている。

3.2　GIAHS 研究会構成メンバーと専門領域

西ら（2019）の報告にもあるように、GIAHS 研究会はゆるやかに組織されていった点に特徴がある。設立当初から研究会で活動を続ける研究者もいれば、途中から参加する研究者、異動などで退会する研究者・関係者もいる。2022 年度のメンバーは表 1 の通りであるが、西ら（2019）報告時との比較において、7 名が退会、5 名が新たに加入した状況にある。また、この他にも修士課程や博士課程の学生も研究会の活動に参加している。GIAHS 研究会が、ゆるやかに組織され、活動が定式化してきた関係上、研究会の代表者がわかりやすく存在するもの

ではないが、2022年度は、地域資源創成学部の西が代表（宴会部長兼務）、同学部の井上が事務局を担っている。また、各メンバーの特技や人脈などを活かし、役割を状況に応じて分担することもある。

表１　GIAHS研究会メンバー（2022年度）

所属[注]	名前（五十音順）	専門分野
地域	井上　果子	農村計画学
農	櫻井　倫	森林利用学
地域	鈴木　良幸	民俗学
教育	関　周一	日本史
農	竹下　伸一	農業土木
教育	中村　周作	人文地理学
地域	西　和盛	農業経営学
農	西脇　亜也	生態学
地域	橋口　正嗣	栽培学
農	藤掛　一郎	林業経済
県庁	古川　智久	協議会
地域	松岡　崇暢	農村社会学
県庁	横山　英二	協議会

注：「地域」は地域資源創成学部、「農」は農学部、「教育」は教育学部、「県庁」は宮崎県庁を指す。

3.3　GIAHS研究会の取り組み

GIAHS研究会の取組は、主に、①定期的に行っている研究活動と、②研究成果を地域等にフィードバックする活動がある。

研究活動は、GIAHS研究会メンバー（研究者）それぞれが、１年のサイクルで研究を計画、遂行、とりまとめる活動と月例の研究会で進捗や研究成果などを発表・議論する活動が基礎となる。１年の流れとしては、まず、(1)毎年４月に１年かけて取り組む研究の目的と計画が個別メンバーから提出され、(2)５月にその研究項目をとりまとめて協議会に提出し、(3) ６月頃に協議会からの受託研究事業を受ける形で研究費予算が配分される。その後、(4)その予算を活用しつつ各メンバーが研究計画に基づき研究活動に励み、(5)その成果を３月にGIAHS研究報告書として取りまとめ、協議会へと提出する。研究計画は、各メンバーの研究関心や問題意識に基づき各メンバーが自由に提案することができ、類似・共通する課題があがった場合や地域全体の基礎となる情報収集を行う調査項目については、複数名が共同で、あるいは連携して調査研究を取り組むよう調整がなされる場合もある。例えば、農林業複合経営の実態を把握するために集落を訪問しつつインタビューを行う調査活動は、メンバー全員で取り組む研究項目となっている。連携して取り組む研究については、例えば、山腹用水路を農業土木の観点から研究する竹下と用水路管理について農村社会学の観点から研究する松岡が連携して行う研究がある。研究者によっては、予算配分を希望せず、月例研究会にのみ参加する者もいる。すなわち、GIAHS研究会はゆるやかに組織されているのみならず、個別研究の取り組み方についても研究者自身が自由度高く設定でき、複数年のコミットではなく、１年毎に見直しながら柔軟に取り組むことができる点に特徴がある。

なお、コロナ禍を経て月例GIAHS研究会の開催について、GIAHS研究会メンバーの研究について議論するのみならず、他県を含む世界農業遺産や日本農業遺産の関係者や研究者を招いてオンライン会議ツールを活用しつつ情報交換・研究交流する機会も含まれるようになった。このような他の農業遺産地域との交流は、他からの学びをGIAHS研究会の活動に取り入れたり、現地視察を行うように交流をさらに深化させたりするなど、発展的な取り組みにもつながっている。

コロナ禍の影響を受け、2020年度は月例研究会についてもオンラインで行うものの、フィールドを訪問することができる分野も人に接することなく研究を継続できる分野に限られるようになった。以前のように対面で集まることやフィールドで地域の方々と接することが制約される時期に行うようになったのが、それまでの研究や地域へのフィードバック方法の振り返りである。また、2020年12月に農村計画学会秋期大会を宮崎大学がホストすることになり、地域シンポジウム（オンライン）をGIAHS 研究会のメンバーが中心となって企画・開催することとなった。それは、GIAHS研究会の活動を自ら振り返り、地域との関係を改めて考えた内容を軸に農村計画学会大会の地域シンポジウム「大学・地域連携のあり方を考える」と題して開催したものであった。

なお、2020年度に開催した月例研究会は、ほぼすべてがオンラインであったが、2021 年度は対面とオンラインのハイブリット方式、2022年度は、（一部の遠方からのオンライン参加者を除き）対面のみによる開催へと戻った。

次に、研究成果を地域等にフィードバックする活動については、GIAHS 協議会向けに作成・発行する年次研究報告書の作成・発行と、その成果発表（共有）がある。また、このような定期的に行う成果のフィードバック以外にも、年々蓄積された成果をとりまとめ、地域に還元するプロジェクト型の取り組みがある。例えば、地域の中学生向け（実質的には小中高校の教職員向け）にGIAHS地域に関する教材を作成・配布は、2018 年度までの研究成果をとりまとめたものである。その他、地域側からの要請に応じて行う地域住民向けの出前講座、地域の高校生向けの出前講義などがあるが、いずれも地域の人づくりに関連する活動への貢献を意識して地域と連携して行っているものである。

但し、コロナ禍以前に行っていたGIAHS研究会から地域にフィードバックする内容は、専門的で地域住民には馴染みにくいため、興味関心を引く内容となっていないことは、GIAHS研究会メンバーが自覚していることころであった。また、2020年以降については、新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け、対面でのフィードバック活動を継続することが困難となった。そこで、対面での成果報告会の再開を検討した際は、コロナ禍以前と同じような方法で地域にフィードバックを行うのではなく、地域住民の方に関心をもってもらえる方法を模索することとなった。GIAHS 研究会の中で協議を経て、新たに企画・実施したのが 2022 年 8月に開催した「高千穂郷・椎葉山地域と私」と題する五ヶ瀬町役場で開催した地域シンポジウムである。ここで工夫したのは、①研究者自身が一人の人間としてどのように地域と関わってきたのか、という「私」的部分を前面に出し、難しい話よりも地域に研究を通じて親しんできた内容を紹介すること、②トークセッションでは地域住民にファシリテーターを依頼し、住民目線で質問してもらい、それに回答するセッションを設けたことにある。ファシリテーターを担っていただいた高千穂町在住の藤木氏の温かく寛容な人柄に助けられた部分も大きいが、地域住民の質問を多く受けた形での対話、交流があり、手ごたえを感じるものであった。

４．GIAHS研究会の異分野連携研究

GIAHS 研究会における取り組みをふり返ると、高千穂郷・椎葉山地域が束ねる異なるディシプリンをもつ複数の研究者の集まりにはいくつかの特徴が浮かび上がってくる。

第一に挙げられる特徴は、地域側が研究者に対し、地域課題の即時的な解決を求めず、研究者自身は、それぞれが抱く問題意識に基づいて研究を展開している点にある。高千穂郷・椎葉山地域の関係者は、自ら主体的かつ自律的にそ

こで地道に地域を取り巻く多種多様な変化に対峙しつつ、自ら困難を克服しようと努力し、遺産的価値を引き継ぎ、日々の暮らしを展開している。地域が山間地の条件不利地にあり、他者に依存して暮らしが成り立つような生活習慣はない。自ら、あるいは地域社会の協力・相互扶助によって創造的に困難を乗り越えることが地域に共通している特徴でもある。研究者は地域の人々に代わって地域の活動を展開することはなく、地域住民が主体的に行うことに寄り添う立場にあり、ともに考えるための知見を蓄積し、その知見を提供することがこれまでの関与の仕方である。

第２の特徴は、GIAHS 研究会に集う多様なディシプリンを持つ研究者の共通点が、「フィールド」からの学びを重要とする点にある。研究者と「フィールド」の関わりについては、各研究者が関心を寄せ、追究する対象が専門領域によって様々であるが、高千穂郷・椎葉山地域には自然科学、社会科学、人文科学のそれぞれに関連する多種多様で幅広い要素が混在している（図１）。また、それぞれの要素は相互に関係しあっている。それゆえに、異なる分野を専門とする研究者が同じフィールドに赴いたとしても、異なる視点から地域の価値を理解し、探究することが可能となるし、自らの専門領域とは異なる領域が様々な局面で自らの問題意識に影響を与えていることを現場のリアリティから理解することができる。そして、それぞれ異なる視点から同じ地域を見て分析した結果を GIAHS 研究会で共有する。すると自らの専門領域でなくとも、馴染みあるフィールドの新たな側面やそれらと自らが追ってきた研究対象とのつながりに関する気づきを他の専門領域の視点から知ることができる。つまり、世界農業遺産として評価されたその複雑で複合的な要素をもつ地域自体が多様な研究者を惹きつけ、新たな学びへと導いている。さらにその研究成果を共有する機会を通じ、分野を超えた知見の蓄積と地域への理解が深まっていく。そのような循環が共通のフィールドにおける学びの蓄積においてみられることは重要なポイントといえよう。

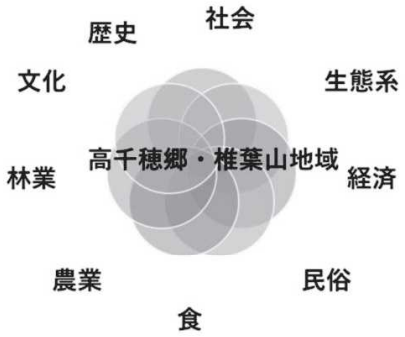

図１　複雑で複合的な要素をもつ「地域」

第３の特徴は、個々の研究者が、他のディシプリンに触れ、複数のディシプリンの知見を積んでいる状況にあることを挙げることができる。そのような変化は複雑な特徴を持つ地域との関わりや GIAHS 研究会で他の領域の研究者の成果発表等からの学びを通じて積み重なっているものである。すなわち、個々の研究者が、（程度の差はあるものの）少しずつハイブリッド研究者的要素を帯びつつある状況ともいえる。

井上（2002）は、ハイブリッド研究者による共同研究によって、複数の個別専門分野の研究者による学際的アプローチを超える成果を生み出しうる（すなわち、1+1+1＞3 を実現する）と指摘している。GIAHS 研究会においても、1+1+1＞3 に向けた今後の異分野連携研究の可能性を議論した。その際、西脇より、「（『1+1+1＞3』よりもむしろ）自分自身が 1 から 1.01 となるとよいと思っている」との発言があった。グループ全体の目標を 1+1+1＞3 と課すのではなく、個々の研究者が他の領域からの学びも取り入れつつ自らを磨く考え方である。まずは、

個々の研究者が、主体的かつ自律的に地域のフィールドに向き合い、フィールドの問題から動かされつつ研究を重ねる。一つのディシプリンに閉じることなく他のディシプリンからの学びも取り入れ、自らを磨く。そのようにして自らが 1.00 から 1.01 へ、そして 1.02 となる。そのような個々の研究者の集まりが結果的に 1+1+1＞3 となる。そのような異分野連携研究の可能性をここに見出すことができる。

５．おわりに

最後に、GIAHS 研究会の今後の展望に触れることとしたい。GIAHS 研究会の活動は、今後も研究者同士、そして研究者と地域がゆるくつながりつつ継続されていく見込みである。そのような「継続」の中にも、新しい展開が期待される動きがある。その一つは、宮崎大学ミッション実現戦略経費「科学コミュニケーションを基軸としたレジリエントな地域社会システムの構築」が採択され、これまでの GIAHS 研究会の活動の延長で地域社会とのコミュニケーションがさらに深化することが期待されることである。このイニシアティブには、「地域社会との対話を通じ、研究シーズの社会的受容性を高めることが必要との認識のもと、地域のニーズに目配りをした研究を行い、その研究に基づいた教育や社会貢献を実現していく」狙いがある。上述の通り、すでに GIAHS 研究会は、地域社会とのコミュニケーションの場を定期的に持つことを重視し、地域との対話を行ってきたが、今後もその取り組みをさらに充実させていく予定である。繰り返しになるが、高千穂郷・椎葉山地域は、住民の主体能力が高く、自らの力で逞しく地域のアイデンティを引き継ぎ、日々の暮らしを地道に紡いでいる人々が多い地域である。そのような地域からは、すでに GIAHS 研究会の研究活動は、受容されている部分は大きいと感じている。その認識の下、注目したいのは、地域住民が将来に向けて日々努力を重ねている地域の「人づくり」である。世界農業遺産に認定される以前は、高千穂郷・椎葉山地域は「フォレストピア構想」を通じてゆるくつながっていた地域であった。当時、「森林理想郷」を目指した人々ーフォレストピアンは、自ら楽しみつつ、「どこにもないはずの場所」が実は山村にあった、との考えのもと、誇りをもって地域づくりに励んだ人々であった（大地 2019）。そのときに種がまかれ、今日においては、GIAHS に認定された高千穂郷・椎葉山地域として現在を生きる人々に引き継がれている。これまで大切に引き継がれてきた高千穂郷・椎葉山地域の宝（価値）をこれからも磨き、それを担っていく人々とともに、我々研究者もまた、自らの研究力を強化し、フィールドに向き合い、地域に寄り添って考え、行動していく姿勢をもつことが重要と考える。それを肝に銘じて今後の活動を展開していきたい。

【謝辞】本稿は、令和４年度世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会事業の一環として宮崎大学が委託を受けて研究した成果の一部です。

―― 参考文献 ――

西和盛、 近藤友大、 芦田裕介、 井上果子、 撫年浩(2019) 「宮崎大学 GIAHS 研究会の取組と異分野連携研究への示唆」『宮崎大学地域資源創成学部紀要』 2 巻、 pp.7-17.

関良基（2005）「人間社会-森林系を複雑適応系として把握する試み」『林業経済』58 巻 4 号、pp.1-16.

井上真（2002）「越境するフィールド研究の可能性」『環境学の技法』東京大学出版会、 pp.215-257.

武内進一（2013）「地域研究とディシプリン」『学術の動向』pp.52-56.

大地俊介（2019）「世界農業遺産とともに」『生まれ故郷を学ぼう、知ろう、考えよう　世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域山間地農林複合システム』世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会、pp.69-86.

2023.01.23.　受理